

『奴隷小説』

～ 一線を越える人を書く ～

桐野 夏生

先月6月のNHKクローズアップ現代で、桐野夏生（きりの なつお）のインタビューによる特集がありました。2021年に女性として初めて日本ペンクラブの会長になり、今、注目されている女性の一人です。



また、第121回直木三十五賞をはじめ、江戸川乱歩賞、泉鏡花賞など多くの賞を受賞している作家です。

インタビューでは、彼女が執筆するうえで大切にしている、「アンフェアネス」と「ラベリング」について話されていました。それは、「社会の不公正さ」や「差別的な決めつけ」を意味しています。

人が気がつかない痛みを抱えながら時代を生き抜いている女性を主人公とした桐野の小説に、今、共感する女性が多いようです。

かつて、桐野夏生というペンネームは、男性と混同すると言われ「桐野夏子」というペンネームを使った時期があり、作家・銀色夏生がいるから夏生はやめて欲しいと言われて、さらに別のペンネームを使ったこともありました。このことを桐野自身は、「屈辱の歴史」と述懐しています。ここにも、桐野自身がつ、「アンフェアネス」と「ラベリング」を強く感じます。

今回のオススメ本、『奴隷小説』は、7つの物語から成る短編集です。短編でありながら、「アンフェアネス」と「ラベリング」が凝縮した作品群になっています。

この短編集が気に入った方は、代理出産をテーマにした、最新作、『燕は戻ってこない』をオススメしたいと思います。